［研究会 報告］

第 215 回　佐賀地域経済研究会

『県庁そろそろクビですか？』講演会

佐賀地域経済研究会では、平成 30 年 5 月に佐賀大学において、「『県庁そろそろクビですか？』－救急車 iPad、ドクターヘリ、ドローン、そして宇宙への挑戦－」と題した講演を開催した。

本講演では、佐賀県庁において、数々の前例のない挑戦を成し遂げてきた「日本一イノベーティブな公務員」と呼ばれる円城寺雄介氏を講師としてお迎えし、最先端技術の活用最前線や「組織の壁を乗り越える方法」について、これまでの佐賀県庁内での取り組みの事例を交えながら、お話しいただいた。

以下は、講演の概要をまとめたものである。

【日時】平成 30 年 5 月 16 日（水）14:30～16:30
【会場】佐賀大学経済学部 4 号館 1 階 4 番教室
【主催】佐賀地域経済研究会

（参加者：80 名）

■講演

◇はじめに

冒頭、円城寺氏より、自身の活動理念の説明がなされた。

役所といえば、「お役所仕事」という言葉があるように、形式や前例を重んじて変わったことをしないというようなイメージを持つ人も多いだろう。確かに、役所には様々な制約があり、新しいことはなかなか受け入れられ難い。しかし、円城寺氏は、そのような環境の中でも、自らがやるべきと思ったことを諦めずにやり通すことを貫いたという。どんなことでも考え方次第でプラスにもマイナスにもなり得る。それは役所の仕事に関しても、言えることなのだ。たとえ前例のない挑戦であっても、それが誰かにとってプラスになるのなら、その挑戦は社会に新しい風を吹かせるきっかけにもなる。円城寺氏はそれを望んでいるのである。

円城寺氏は、その著書『県庁そろそろクビですか？』の出版にあたっても、こうした信念を強く持ち続けた。当初、著書を出版する予定はなかったが、出版社から何度も依頼されたことで、執筆を決断した。もともとは自ら希望した訳ではない著書の出版ではあるが、「求められているなら最良のものにしたい」という思いから、円城寺氏は、書店を訪れた人々が手に取りやすいように、著書のカバーにイラストを挿入することを出版社に提案した。しかし、それは新書の表紙は定型のものという出版社の決め事に反することであり、受け入れられなかった。それでも諦めずにアイデアを練り続けた結果、円成寺氏は帯をカバーサイズにし、そこにイラストを挿入するという大胆な策を思い付いた（写真 1 を参照）。

写真 1

最終的に、円城寺氏は出版社を説得することに成功し、自らが求めるものを実現させることができた。近年、同様のスタイルの新書が増えているが、そのきっかけになったのかもしれない。ちなみに、円成寺氏は、著書の印税をすべてNPO や CSO（Civil Society Organization）へ寄付している。円城寺氏は、著書の出版において、金銭的な面からも社会に何らかのプラスの効果が発生するように努めているのである。

◇救急車改革

続いて、円城寺氏から、佐賀県庁内の医務課に配属されていた際に行った活動の説明がなされた。

1999 年時点の佐賀県では、救急車を呼んでから患者が病院に運ばれるまでの時間は平均 27 分であった。それから 14 年経った 2013 年時点になると、我々の日常にはスマートフォンやタブレットなどの電子端末が普及し、生活の利便性が高まった。それにもかかわらず、救急車を呼んでから患者が病院に運ばれるまでの時間は逆に 39 分と高まっていた。なぜこのような結果に陥ってしまったのか。その原因は、高齢化に伴う疾病患者の搬送人数の増加にある。病気は怪我と比べて見た目だけではどのような状況にあるのかの判断が難しく、なかなか搬送先が決まらないのだ。今でもこの問題の抜本的な解決はできていない。しかし、このような実情を目の当たりにし、円城寺氏は、佐賀県の先人たちの行動を学び、問題解決に向けてその知恵を活用しようと考えた。

幕末維新期の佐賀藩は、日本でも有数の最先端の科学技術を有しており、それゆえに最強の軍隊も有していたといっても過言ではないものだった。それでは、どのようにしてその地位を確立したのか。当時の藩主である鍋島公は、主に 2 つのことを実践していた。それは、現場主義と率先垂範である。率先垂範というのは、思いついた人が率先して自らやってみるということである。鍋島公自らがオランダの文化や学問を習得するなど、世の中の常識に反することを行ったことが、佐賀藩の成功の一因となったのである。こうした先人の行動にヒントを得た円城寺氏は、自身も救急車の現場で何が起こっているのかを実際に体験しよう、という発想に行き着いた。

善は急げではないが、円城寺氏は、現場主義と率先垂範の遂行のために、佐賀広域消防局に救急車出動時の同乗を頼み込んだ。もちろん、そう簡単に事が運ぶ訳はなく、最初はこっぴどく叱られたという。それでも何度も頼み続けたところ、当時の消防課副課長が円城寺氏の熱意を真摯に受け取り、消防局長に直談判した。その結果、救急車出動時に円城寺氏の同乗が許可されることになったのだ。

救急車出動時の同乗によって、それまで公にはなっていなかった救急車が抱えるいくつかの問題点が発覚した。しかし、成すべきことがたくさんあっても、時間制約の中、できることは限られている。たくさんの過大の中のうちの 1 つに集中して、成すべきことを考えなければならない。そんなドラッカーの教えを念頭に、円城寺氏が重点的に取り組んだ置いのは、患者の受け入れ先がなかなか見つからないという課題であった。救急隊員がその都度電話を掛けて患者の状況を病院に伝え、受け入れ可能な病院を探し回っていたのだ。ここに改善の余地があると感じた円城寺氏は、スマートフォンやタブレットなどの電子端末を使って、各病院の救急患者数や専門医の在籍状況など、救急患者の受け入れに関する情報を共有できるシステムがあれば良いのではないか、という考えに至った。

しかし、その実現には大きな壁があった。それはお役所の壁であった。当然のように佐賀県庁では全く相手にされなかったのだ。壁にぶつ

かった結果、円城寺氏は、自身の動機が私利私欲ではなく、社会のために本当にやり抜きたいという思いのものであることを再確認した。やり抜くと決めたらやる、という強い意志があれば、投げかけられている批判もアドバイスに聞こえてくるということだ。

それから1年経ち、努力の甲斐あって、99さがネットという愛称を持つ「佐賀県医療機関情報・救急医療情報システム」が構築され、Iタブレット端末が救急車に配備されることとなった。その結果、救急患者の受け入れ先の探索作業は簡略化されて、現場の滞在時間が約1分縮まったのだ。救急患者受け入れ情報の共有による効果はそれだけではない。この情報が可視化されたことで、病院間の関係が互いに刺激し合う関係へと進化した。各病院は「他の病院はたくさん救急患者を受け入れているから、当院ももっと積極的に受け入れるように努力しよう」と考えるようになったのだ。

タブレット端末には、救急患者の受け入れ先の探索作業の簡略化の他にも複数の用途がある。1つは、タブレット端末から取得したデータを使って、データ分析ができることだ。データ分析によって、佐賀県内の各地域で搬送時間に差があることが判明し、その当時、議論の真っ只中にあったドクターヘリの導入が実現に至った（写真2を参照）。もう1つは、タブレット端末内でアプリを活用できることだ。アプリの活用によって、外国人と会話したり、難聴者と筆談をしたりすることが可能となり、患者との意思疎通の円滑化にも寄与できている。

このように円城寺氏の提案が実現したことによって、佐賀県内の救急医療体制に変革が起き、様々な副次的な利益が生まれた。一方で、変革とは新しい問題を生むものでもある。根本的なところを突き詰めると、救急車の出動回数が減少すれば、より円滑に患者を搬送でき、より多くの命が助かることになるだろう。そのために有効な手段の1つが、大病を予測できるシステムの導入である。しかし、これにはまだ課題が多く、実現には至っていない。それでも、現状に満足しないで、人々の生活水準のさらなる向上を目指して、様々な新しい挑戦を続けることが重要である。

写真2

◇ドローンの活用

現在、円城寺氏が目を付けているのが、救急現場におけるドローンの活用である。今後、ドローンは多様な分野で重要な役割を担うと予測されるため、円城寺氏は佐賀県庁で独自のドローンを制作することを提案した。しかし、これもそう簡単にはいかなかった。結局、佐賀県庁で独自のドローン制作を行うことは認められなかった。そこで、円城寺氏は自身の有給休暇やアフターファイブを使って、手弁当で独自のドローン制作を行うことにしたのだ。

ドローンにはカメラが搭載されており、人間の目視が困難な場所での人命救助にも役立つ。実証実験では、ドローンでいち早く遭難者を発見し、そこに救助隊が向かうことで、救助隊のみで捜索していたときよりも捜索時間が短縮されるという結果が得られた。ドローンは、熊本地震の際にも使用され、救助だけでなく、道路や家屋の状況を判断することにも活用され

た。また、マラソン会場においてドローンを上空に飛ばすことによって、ランナーの異常をいち早く発見することができたという事例もある。これらのドローンを用いた IoT 事業は、国の承認を受けることができたため、国の支援を得られるようになった。

◇講演のまとめ

これらの事例を踏まえて、円城寺氏は、新しい挑戦において念頭に置くべきことを以下のようにまとめた。

社会を変えていくためには、自分が目指す未来から今を逆算し、口で言うだけではなく、自ら率先して行動を起こしてみることが大切である。新しく何かに挑戦することは、今は理解されないかもしれないし批判されるかもしれない。それでも、いつかきっと社会のためになると信じてやり通すべきである。こうした信念を持つことによって、批判もアドバイスに聞こえてくるようになる。

■質疑応答

講演終了後には、フロアからの質問を受け付ける時間が設けられた。

佐賀大学の学生の聴講者から「今回は円城寺氏の成功例について話を伺ったが、失敗もあったのか。失敗があった場合、それをどのようにして乗り越えたのか」という質問が出された。

これに対して円城寺氏から「失敗ももちろんあった。成功したのは 10 の案件の内 2～3 程度である。最大の失敗は、社会人になって初めて勤務した土木事務所での失敗である。用地交渉のために、失礼があってはいけないと思いスーツを着用して、土地所有者を訪問したところ、「こんな綺麗なスーツを着て、君は私の所有する土地を見てきたのか。こんな人に私の土地を渡すことはできない」と怒られた。それからは図面だけでなく、実際に土地に足を運んで確認するようにした。そのようにして、土地を売却する側の気持ちに寄り添うことに努めた。この失敗から、机上だけでなく、現場に足を運んで自分の目で判断することが大切だと学んだ」という回答がなされた。

別の聴講者から、「円城寺氏は、本来ならば規格外であるような仕事を積極的に行ったり、自らの有給休暇やアフターファイブを使用して社会貢献を行ったりしているが、その原動力は何か」という質問が出された。

この質問に対して円城寺氏から、「自分がこのように積極的に行動してきたのは、先人たちの知恵を学んでいたことが大きい。先人が行ってきたことには、私たち子孫の生活の利便性を高めたいという願いが込められていると感じている。その願いがバトンのように今に繋がっていると思えば、自分も社会のために何か行動を起こすべきだと考えている。そして、そのバトンをまた次の子孫に渡したい」という回答がなされた。

（森永 麻里子）